

温故知新

1

学園の教育改革は、常に「教育信条」「建学の理念」「建学の精神」を実現するために行っている。今、学園で力を入れている「社会人基礎力」も、実はこの三つからヒントを得ている。創立者の人生を通してこの三つを深く理解する上で参考になる箇所を『おもいでぐさ』（寺部だい自叙伝）の中からいくつか紹介する。

「私はまず、私の母について、語らせていただきたいのです。……本当にお母さんなくしては私の一切があり得ないのですから、暫く母を語ることをお許しください。母はその名をやつと申しまして、愛知県碧海郡桜井村の農家に生まれました。

相当裕福な家庭であつたらしく、男衆女衆を数人使っていたそうです。ところが母が成長したころから……、田畑も次々に人手に渡り、家庭生活は日に日に転落の一途をたどり、悲惨にあえぐようになりました。そのため、苦しい家事の切り回しに没頭させられた母は、すでに婚期を失っておりましたが、そうしたあるとき、正式の道を踏むことなく、私を生み落とす運命になったのであり

ます。時は明治十五（一八八二）年十月二十日で、母はその時、四十歳でした。父という名のみのその人は、村内の有力者で名誉職にも就いており、三人の子供さんがありました。……私の出生につきまして、その父と申す人は、役柄の体面上、私を里子に出してしまいうように母を説得し出しました。はじめ不服を唱えていた母も、相手の立場、考え、自分の境遇を思つて、遂に心を鬼にして、生後十五日、まだ親の顔もわからない私を、岡崎で櫛屋を営む人の家に里子に出す決心をしてしまいました。いよいよ明日は、その里親の所へ連れられてゆくという日の夜、母は、安らかな小さな寝息をたてて、重ね布団に眠るわが児を、涙ながらにじつと見つめていました。

『……不運な星の下に生まれた我が身にふりかかる悲しみも知らず、私から去つてゆくこの子よ。里親となる父母はどんな人たちだろう。……お金だけ着服して、乞食にでもやつてしまうのではないだろうか。……たえられない。もう我慢できない。そうだ。そうだ。身を粉にしてもいいではないか。母と娘とふたり旅路。どんなに険しくても手を取つて一生歩きつづけよう。』

母の愛は、遂に私をその手許につなぎ止めました。」

現在の安城学園があるのは寺部やつのお陰だと学園では考えている。

2

「私は七才になりました。その年、母は突然、善光寺参詣を思いました。母は仏教に篤い信仰



安城女子専門学校・安城女子職業学校正門

をもっていたので、両親を始め先祖代々の供養と、母娘ふたりの開運を祈願するためだったのでしょう。

母は私の手を引いて、その年（明治二十一年）の四月、信濃の国へ旅立ったのであります。私は塵（こいり）を背負い、杖を握り、母に連れられて歩きました。

こうした難行苦行を続けること二ヶ月。善光寺詣りの念願を遂げての帰り道、疲れ果てた母と子は二股の分かれ道にさしかかりました。陽はすでに山の向こうに姿を没してほの暗く、人影さえもありません。まったく途方にくれてしまいました。当時の奥三河から信州の山間には山犬（狼の一種）や猪が沢山棲（す）んでいて、相当多くの被害を出しているというところを、前から耳にしておりましたので、そんな山の中で夜を明かすことはできません。

ところがどうでしょう。その角の所に一基の石が倒れていたのです。まさに道標です。薄明かりの中で、指をこすりながら読んでみると、『右、かきのみち』と刻まれていたのです。かくて山犬の餌にされることもなく、無事わが家に帰ることができました。

母は無学ではありませんでしたが、平仮名の読み書きを身につけていたのです。もし、あの時、道標は見つけても、『右、かきのみち』の文字が読めなかったら、私たちはどうなっていたでしょうか。家に

帰ると、すぐ母は、私を小学校に入れるのだといって、出かけてゆきました。」（『おもいでぐさ』より）

信仰の篤い母による寺部だいの数々の経験が、学園の「真心・努力・奉仕・感謝」の四大精神につながっている。

「村から離れて、女の職業というと、小学校の先生になるか、看護婦になることです。私は初志通り、小学校の先生を望みました。

しかし、十八才にも達しているとはいえ、系統のある組織的な教育を受けていない。だから師範学校へ入りたくても、その受験資格がない。その時、天野先生から、東京に、渡辺裁縫女学校というのがある、裁縫教員を養成していると聞きましたので、早速、学則を取り寄せてみたのです。

一時も早く、上京して入学したいと思い、母に相談いたしますと、母は、『親子ふたりの農業と、古着商とで、何とか生活の見込みが立つようになったのに、とんでもない』と。私は半病人のように、ふらふらになってしまいました。母もこれを見兼ねて、上京を許してくださいったのです。」（『おもいでぐさ』より）

家政学はこれからの社会でますます必要になる。もしだいが看護婦を選んでいたら、今とは全く異なる安城学園になっていたのであらう。



かつて安城女子職業学校の正門だった石柱。現在は安城学園高等学校の中庭に屹立

明治末期の三河地方では、「女が学校に行く。それはドブにお金を捨てるようにもつたいないことだ」という風潮が強かった。しかし、創立者の一人寺部だいは、「そうではない。男に生まれようが女に生まれようが、人間としてこの世に生を受けた限りだれでも無限の可能性を持っている。一人一人の潜在能力を可能性の限界まで開発するのが教育だ」と考え、当時安城に女性のための教育機関がなかったので、実際に学校を作った―これが、安城女子職業学校である。以来、学校法人安城学園では、「だれでも無限の可能性を持っている」を合言葉にして教育活動を展開してきた。

ところで現在の日本の社会には数多の課題があるが、これらの課題は政治や行政に携わる人々だけが解決するものではなく、一般の社会人にとっても共通の課題である。自分の世界のことだけでなく、政治・経済全般にも広く深く関心を持つ必要がある。

また、学校教育も大きく変わる必要がある。基礎学力と専門知識・技術を身に付けることを中心にした学校教育から、基礎学力と専門知識・技術に加えて課題解決能力を身に付けることを中心にした学校教育へ―。

そこで、学園では様々な産学連携事業に取り組んだ。また、経済産業省の提唱する職場と地域社会で多様な人々と必要とされる社会人基礎力の育成事業にも参加した。これらの事業を行う中で、PBLという教育手法を通して、学生の学ぶ意欲を高めることができること、学生が学ぶ喜びを経験することができること、さらにこれからの社会で必要な問題解決能力を身に付けることができることを発見。そこで学園として、社会人基礎力を核にした教育改革によって『教育にイノベーション』を興すべく、「無限の可能性」という教育プログラムを現在開発中である。これは、「無限の可能性」という創立者の教育信条を現代社会に甦らせる試みでもある。

— 生きる意志に満ち溢れ、生きる力に満ち溢れ、生きる欲びに満ち溢れた人を育てる— ために、学園ではこれからも「無限の可能性」に挑戦してゆく。